

# 社 会 科

中 村 光 男  
福 永 善 則  
菅谷内 清  
沢 野 等

## はじめに

昨年度より、私たちは「主体者としてかかわる学習」の成立をめざし、研究を進めてきた。子どもたちに社会事象の持つ意味を自分とのかかわりのなかで考えさせ、社会の変化に対応できるような力を身につけさせたいと願っているからである。

振り返ってみれば、「単元で何をこそ、子どもに生きて働く力として、身につけさせねばならないのだろうか」「主体者としてかかわる学習を成立させる獲得・再構成・適用の三段階とは、どのようなものなのだろうか」などと、右往左往の一年であった。

このような試行錯誤の一年間ではあったが、社会科として、次のような成果を得ることができた。

・生きて働く力を内容面・機能面・子どもの側から吟味し設定しようと努めたことは、社会科の授業の命でもある単元の目標をより鋭く、明確にとらえることができるようになった。

・ネットワークを図るために、どのような要素を子どもに獲得させるべきか追い求めてきたことは、授業において何を指導の重点におけばよいのか見通しをもたせてくれるようになった。

・子どもの追求意識が途切れず、最後まで連続するように単元設計を工夫したことは、子ども一人ひとりの見方・考え方を大切にしようとする授業実現の第一歩となった。

本年度は、これらの成果のうえに立ち、生きて働く力の設定とネットワークの達成をさらに確かなものにするために、研究の重点を次のように設

定することにした。

- ①社会科の本質、教科の生きて働く力から単元の生きて働く力を設定する観点をさぐること
- ②要素やネットワークに対する理解をさらに深め、どのような働きかけをおこなうことが、ネットワークを図るうえで重要かさぐること

## I 生きて働く力のとらえ

### 1 社会科の本質と生きて働く力

「今度、新しく設けられた社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力を致す態度や能力を養成することである。」これは、戦後、新しい教科として新設された社会科について説明した昭和22年度版学習指導要領・社会科編の冒頭の文章である。以来、四十数年を経るなかで社会科に対する考えも幾度か変遷してきたが、この基本的な性格は変わることなく受け継がれてきた。私たちは、この社会科の設立と変遷の歴史をあらためて学ぶなかで、社会科の本質を次のようにとらえた。

#### 社会科の本質

広い視野から社会生活(人間の営み)を理解させ これを通して公民的資質の基礎を養うこと

ここでいう公民的資質とは次のようなものである。

- ・社会生活について、自ら考え判断する能力
- ・民主主義や平和を守る国民の一人として、自他の人格を尊重しようとする態度

・社会生活上の義務や責任を果たそうとする態度  
つまり、市民的資質とは民主的な国家・社会の  
成員として求められる能力や態度を意味している。

教科の本質であるこの市民的資質の基礎を養う  
ためには、社会生活に対する深い理解がぜひとも  
必要である。社会生活に対する深い理解なくして  
は、自分としてどのように社会に参加すべきか、  
また、そのためにはどのような力をこそ身につけ  
なければならないか分からないからである。子ども  
にも社会生活を深く理解させることが、まずもっ  
て大切なこととなるのである。

以上のことから「教科の生きて働く力」を、次  
のようにとらえることにした。

教科の生きて働く力

人間が 人間相互あるいは 自然環境とかか  
わりながら暮らしているという社会生活の理  
解を図るための知識・技能

2 単元の生きて働く力を設定するために

私たちがとらえた社会科の生きて働く力は、前  
節で述べたとおりである。私たちは、この生きて  
働く力を分野別にとらえることによって、より具  
体化することにした。

分野	各分野における生きて働く力
産業 ・ 地理	・身近な地域の自然環境や人々の生活 生産 流通の様子がわかること ・国土の自然環境や人々の生活 生産 流通 資源などの様子がわかること
歴 史	・地域の人々の生活の変化がわかること ・地域の発展に尽くした先人の働きがわかる こと ・国の発展に大きな働きをした先人の業績や 文化遺産がわかること
公 民	・地域の人々の組織的な活動がわかること ・政治の働きや仕組 考え方がわかること ・国際社会における日本の役割がわかること

社会科という教科は、学習のなかで、子どもの  
社会生活に対する事実認識、意味認識を深め、そ  
れを基盤として、個々の子どもの考え方・生き方  
に問いかけていこうとするものである。そこで単  
元での生きて働く力も、子どもによって自分や自  
分の生活と密接なかかわりをもったものとしてと  
らえられ、身につけられるようなものでなければ  
ならない。このような内容にふさわしい単元での  
生きて働く力になるように、分野別の生きて働く  
力を具体化しなければならない。

このように考え、私たちは、さらに社会科の本  
質に問いかけることにした。その結果、以下の観  
点をとおすことによって、分野別の生きて働く力  
を単元の生きて働く力へと具体化し、設定すべき  
であると考えられるようになった。

- ① 人間の生きざまにふれようとする
- ② 現実の社会の問題にふれようとする
- ③ 現実の社会の変動にふれようとする

このとき、子どもの実態をしっかりととらえて  
おくことが大切である。なぜなら、子どもは誰も  
が社会や集団の一員であるといっても、社会や集  
団のなかでの人や事物とのかかわり方には違いが  
あったり、興味、関心にも違いがあるからである。

また、子どもに身につけようとする生きて働く  
力が、今後どこでどのように活用されるかを検討  
し、設定していくことも重要なことである。

社会科編Ⅲ章実践例に掲げた二つの単元におい  
て、上記の①②③の観点のいずれが活用されたの  
かを簡単に紹介したい。

実践例に掲げた「3年 私たちの暮らしと商店  
街」「5年 サービスを売る宅配便」は、ともに産  
業・地理分野の生きて働く力にかかわるものであ  
る。3年の実践では、分野別の生きて働く力を単  
元の生きて働く力へと具体化する観点①から③を  
受け、特に①の観点によって単元の生きて働く力  
を「店どうしの販売に対する競合の姿が商店街を  
発展させている」と設定している。また、5年の  
実践では同じように③の観点でとらえ直すこと  
によって単元の生きて働く力を「利用者のニーズに  
応えるサービスの提供に努力・工夫している」と

設定している。この時、各々の単元において、単元の生きて働く力が、子どもの実態、生きて働く力の機能面をも十分加味して設定されたことはいわずもなごのことである。

詳しくは、実践例のなかで見ていただきたい。

## Ⅱ 要素の構成について

私たちは、学習のなかで生きて働く力が生み出されるときの様相・状態をネットワークと呼んでいる。ネットワークでは、既に学習し身についている既存の生きて働く力に、単元で新しく学習した知識・技能（私たちは、これを要素と呼ぶ）が結びつき、生きて働く力が生まれてくる。

子どもに生きて働く力を身につけさせることをめざし、ネットワークを図るためには、次の理解を深めなければならない。一つは、社会科におけるネットワークとはどのような様相・状態なのかということ。もう一つは、既存の生きて働く力と結びつき生きて働く力の基盤を作り出す要素とは、どのようなものであるかということである。

### 1 社会科におけるネットワーク

社会科においては、単元の目標である生きて働く力を身につけるために、まず単元で取り上げる社会事象のありのままの姿をつかもうとする事実認識の段階をふむ。このとき、社会事象を事実認識するとは、子どもが雑然とした社会事象を事実をもとに分析したり、比較したりしてみることによって整理し、いくつかのまとまった知識・技能としてとらえることである。これが、生きて働く力を構成するもととなる要素なのである。

このようにしてつかみとった知識・技能を関係づけ、自分や社会にとっての価値や意味・法則性を見出すことによって、社会事象は子どもに意味認識されていく。生きて働く力の習得は、子どもが社会事象を事実認識から意味認識へと高めていく、一連の過程のなかでおこなわれるのである。

社会科でいうネットワークとは、生きて働く力を生み出すために、子どもが社会事象を事実認識から意味認識へと高めることである。

### 2 要素のとらえとネットワーク

前節でネットワークとは、社会事象を事実認識することによって得たいくつかの整理され、まとめられた知識・技能（要素）が意味認識されることであると述べた。この生きて働く力の基盤を生み出すもととなる要素とは、どのようなものなのだろうか。要素が意味認識される時の様相を、子どもの「わかり」の面から見ることによって、次のことが明らかになった。

要素には、次の二つのタイプがあることに気づいた。一つは、子ども自らの力で事実認識から意味認識へと高められる要素が存在することである。私たちは、このような要素を「要素A」と呼ぶことにした。もう一つは、子どもだけの力で意味認識することが困難であり、教師の働きかけがなければ意味認識されない要素が存在することである。私たちは、これを「要素B」と呼ぶことにした。

要素A・要素Bの性格を考えれば、単元において、まず要素Aが獲得され、その後要素Bが獲得されるように計画することが、子どもの自然な思考の流れに沿うことである。そこで、生きて働く力の基盤が生まれるネットワーク時に、既に意味認識され獲得されている要素Aと結びつきながら要素Bが既存の生きて働く力をもとに意味認識されるように計画すべきである。要素Bの意味認識は、生きて働く力の基盤づくりに直結する重要な局面なのである。

そこでネットワーク時において、要素A・要素Bを子どもがどのように意味認識していくものなのか、子どもの「わかり」を説明することが必要となってきた。その結果、全体理論編Ⅲ章2節「要素の構成」で述べたように、次のことが分かった。

要素Aは、子どもの「これまでの見方・考え方・感じ方」を用いることによって、自分や社会にとっての価値や意味・法則性を見出すことができ意味認識されるものであること。要素Bは、子どもの「これまでの見方・考え方・感じ方がかわる（深まる）」ことで、意味認識されるものであるということである。

このことから考えれば、要素Bを意味認識させ

ネットワークを達成するためには、次のような教師の働きかけが必要であることが分かる。一つは、要素Bの存在に気づかせることである。もう一つは、子どもの「これまでの見方・考え方・感じ方を変える（深める）」ことによって、要素Bを意味認識へと高めることである。

### 3 要素の決定

社会科編1章2節「単元の生きて働く力を設定するために」において、教科の生きて働く力を単元の生きて働く力へと具体化するために三つの観点があることを述べた。この三つの観点は、単元で取り上げた社会事象（教材）を事実認識するための切り込み口でもある。単元の生きて働く力を身につけさせるために、社会事象（教材）の事実認識をこれらの観点からおこなうことになるのである。そこで、どの観点を中心として単元の生きて働く力が設定されたかによって、生きて働く力を構成する要素に違いがでてくることになる。生きて働く力の基盤づくりと直結する重要な要素である要素Bにおいても、それぞれ固有なものが見えてきた。以上のことを単元の生きて働く力を設定するための①②③の観点別に述べると、次のようになる。

- ・ 観点①を中心に設定された単元の要素  
(要素A) 人間の生きざまにかかわり、それを明らかにするための知識・技能  
(要素B) 人間の生きざまが最も色濃く表れ、しかも子どもがとられやすい「人々の努力や工夫の姿」を表す知識・技能
- ・ 観点②を中心に設定された単元の要素  
(要素A) 社会の問題点やそれを明らかにするための知識・技能  
(要素B) 「自分や社会にとって、最も切実な問題」を明らかにする知識・技能
- ・ 観点③を中心に設定された単元の要素  
(要素A) 社会の変化や動きをとらえるための知識・技能  
(要素B) 「特に社会の発展の契機になったり、社会発展の中心的な原因となったもの」を明らかにする知識・技能

## Ⅲ 実践例

### 3年「わたしたちのくらしと

商店街」の実践を通して

#### 1 教材化にあたって

##### (1) 素材について

堅町商店街は金沢の中心に位置し、土、日（祭日）には、市内はもとより、他の地域からも車や、電車、バス等を利用してやって来る、たくさんの買い物客でにぎわっている。特に若者に人気があるのは、多くの衣料品店、とりわけ婦人服の専門店が多く立ち並んでいることが大きな理由である。

多くの婦人服を売る店が互いに対立せず、それらの個々の店が商売を成立させているのは、数多くの婦人服屋がひとつのまとまりとなっており、お客の希望する品物を用意しているからである。つまり、たくさんの婦人服の店があれば、自分の気に入る服が見つけれられるだろう、だからあの堅町商店街へ行こう、というお客の心の動きをうまく利用し、一軒一軒の婦人服の店が、いわば協力して、微妙に異なる服を準備して、たくさんのお客を集めているのである。

##### (2) 生きて働く力について

本単元の生きて働く力を、社会科編第1章2で述べられている観点①人間の生きざまにふれるをうけ、次のように設定した。

個々の店が独自に また他の店と協力しながら販売の努力 工夫を行っていることを理解し 同種の他の店との競合も商店街を発展させていることに気づく

今日、人々の消費生活をながめてみると、より安くより品質の高い品物を求め、また、最も自分に合った物を求めている。このように、人々の消費生活は多様化し、時と場合に応じて、様々に買う店を選択して品物を購入している。

こうした消費者の動向を一早くキャッチした販売の工夫は、堅町商店街が最も色濃く反映している。そのため、堅町商店街は他の商店街に比べ、若者の衣料を売る商店街として専門店街化してい

る。そしてそのことは、先に述べたように堅町商店街の発展に結びついているのである。

同種の店が一つの商店街に多数存在していること、すなわち店同士の競合が販売の促進に効果的であることを理解しなければ、商店街の働きを意味認識することはできないのである。

以上述べたことから、生きて働く力を設定したのである。

他の店との競合が商店街を発展させていることを理解することから身につけられる生きて働く力は、「野菜作り」や「自動車生産」といった産業学習にも機能すると考えられる。

また、堅町商店街は学校の近くに位置し、身近な存在として、子どもたちは興味、関心をもって主体的に追求できる学習対象であると考ええる。

### (3) 生きて働く力の要素とネットワーク

先に述べた本単元での生きて働く力に対して、子どもたちが、これまでに学習して身につけている生きて働く力には、生活科での買い物の体験で得られた

スーパーマーケットでは お客が買い物しやすいように 色々な品物を見やすくなっている

があると考えた。この既有的の生きて働く力が結びつく要素として、社会編Ⅱ章(3)要素の設定(28ページ)で述べている、観点①を中心に考え、店の独自性、協力、競合に視点をあて、以下の4つを設定できた。

- 要素A ①家人は店を選んで品物を買う  
②堅町商店街にある個々の店は 独自に販売の努力をしている  
③堅町商店街にある店は 他の店と協力して販売の努力をしている
- 要素B 婦人服を売る店がたくさんあり競合している

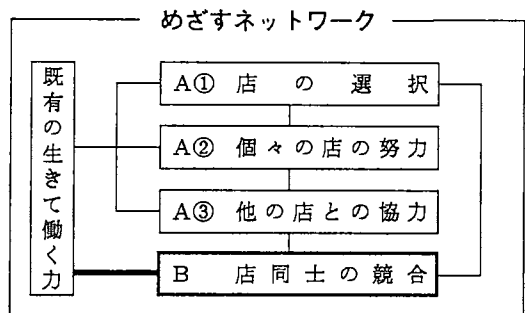
要素Aについては、買い物調べや見学によって子どもたちが意味づけられるものと考ええる。

ところが要素Bについては、単元に入ってから子どもたちの意識の流れからして、容易に意味づけられないだろう。子どもたちは同種の店が多数存在することは、販売の努力、工夫と矛盾すると考えると予想するからである。

要素Bを意味認識させるための働きかけとして、子どもを買い側に立たせることが効果的であると考える。同じように婦人服を売る店がたくさんあることは、買い側にしてみれば、様々の種類の洋服の中から自分が最も気に入る一着が選べるという利点に気づかせられると思うからである。

この客の利点が見方を変えれば、店の利点であるということにつなげることができれば、要素Bは既有的の生きて働く力とネットワークすることができると思われる。

以上述べてきたことを図にあわらすと、次のようになろう。



### (4) 主体者としてかかわらせるために

本単元における主体者としてかかわる姿は、堅町商店街ではどうしてこんなに多くのお客を集めているのだろうか、という意識で追求することである。この意識は堅町商店街と他の商店街を比べお客の数が堅町商店街の方が格段に多い事実を知ることによって生まれる。

この意識が見学を通すことによって、人々の努力、工夫の姿を探ろうという意識につながるように教師の働きかけを工夫したい。

同種の店が多数、一つの商店街に存在することを知った子どもたちは、それが販売の努力と矛盾するのではないかという疑問をもつことで、一層販売の努力・工夫への追求を深めるだろう。

(5) 単元計画（総時数10時間＋課外）

	児童の主な意識の流れ	要素と働きかけの位置
獲得	<p>〈買い物調べの表からわかることを発表しよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎日、お母さんは買い物をしている・食べ物は近くの店から買う</li> <li>・休みの日は遠くの店へも買いに行くよ・いろんな店で買っている</li> </ul> <p>家の人はいろんな店で買い物をしている でも身近なものは近くで買っている</p>	<p>要素A① 店を選択している</p>
6	<p>〈わざわざ、片町や香林坊 堅町の店まで出かけるわけは何だろう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いいものを売っているからだよ・値段が安いからじゃないかな</li> <li>・買い物だけでなく お食事もできて ついでに買い物ができる</li> <li>・堅町商店街へやってくるお客さんの数がとても多い</li> <li>・堅町商店街にある店は いろんな工夫をしてお客様を集めているんだろう</li> </ul> <p>〈堅町商店街にある店はどんな工夫をしてお客が来るようにしているだろう〉</p>	<p>要素A② 店独自の工夫</p>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見学して 工夫を見つけてこよう</li> <li>・かっこいいお店が多かった・お店が派手な感じがした</li> <li>・飾りつけも工夫してあった・歩いている人に目立つようにしてあった</li> </ul> <p>一軒一軒のお店が それぞれお客さんがたくさん来るようにしている</p>	<p>要素A③ 他の店との協力</p>
課外	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな駐車場があった・歩道が切れ目なく続いていた</li> <li>・道路もきれいだっただよ・大売り出しやセールもしていた</li> </ul> <p>お店は他のたくさんのお店といっしょに協力してお客さんを集める工夫をしているんだ</p>	<p>働きかけ① 全店共通の駐車券について考える</p>
再構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お店の人は一人でも多くのお客さんに来てほしいと思っている</li> <li>〈同じように婦人服を売るお店がたくさんあったけど大丈夫かな〉</li> <li>・そういえば洋服を売る店が多かったね</li> <li>・でも買う人にしたら都合がいいよ たくさんの中から選べる</li> <li>・自分の気に入りの服が買えるからたくさんのお客さんが集まる</li> <li>・そしたら たくさんの人が堅町商店街へ買いに来るよ</li> <li>・たくさんの人が買いに来れば たくさん婦人服屋があっても大丈夫かも</li> </ul> <p>洋服を売るお店がたくさんあっても 自分にピッタリ合う服を買いにたくさんのお客さんが来るから大丈夫なんだろう</p>	<p>働きかけ② 同種の店がたくさんあってももうかるのかを問う</p> <p>要素B 店が競合している</p>
2	<p>〈自分たちが考えたことが正しかどうか確かしてみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・店の人にインタビューすればいいよ・お客さんにも聞いてみよう</li> </ul> <p>やっぱり他の店があってもたくさんのお客さんが来るから大丈夫なんだ</p>	<p>働きかけ③ 買い物にとって都合がいいという視点をあたえる</p>
適用	<p>〈ショッピングセンターもいろんな工夫をしているのだろうか〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1つの建物の中にいろんなお店があって一度に買い物ができる</li> <li>・大きな駐車場や 遊んだりする所もあった</li> <li>・ショッピングセンターの中にも同じ種類の店がある</li> </ul> <p>ショッピングセンターは買い物しやすくして便利だ それに同じ種類の店がいっしょになってがんばっている</p>	<p>働きかけ④ 大型ショッピングセンターの販売の工夫を調べさせる</p>
2		

## 2 単元の実際と考察

### (1) 授業の実際と考察

ここでは、獲得、再構成、適用の一連の過程で、子どもたちの意識がどのように深まり、学習されていったのか、その概略を述べ、また、特に再構成段階では評価観点①（学びの姿は表れていたか）、評価観点②（ねらいは達成されたか）から考察を加えたい。

#### ① 獲得段階

本単元の主体者としてかかわる姿は「堅町商店街ではどうしてこんなに多くのお客を集めているのだろうか」という意識で追求することであった。子どもたちにこの意識をもたせるために、堅町商店街が他の商店街に比べ、いかに客の数が多いかを数字で示した。

すると当然、子どもたちは驚き、同時に堅町商店街に強い興味をもった。そして「堅町商店街はお客を集める工夫をいろいろしているのだろう、そのことを見学して調べてみよう」という意識が子どもたちに芽生えた。

見学を通して子どもたちは、店が独自に行なっている工夫（要素A②）と他の店と協力して行なっている努力（要素A③）を理解した。

店独自の工夫については、「飾りつけ」、「品物の並べ方」、「明るい雰囲気作り」等を見つけられた。また店同士の協力については、堅町商店街には「電柱がゼロである」という事実をもとに学習を進めた。子どもたちはそのような環境整備やバーゲンセール、歩行者天国も店同士が協力して自分たちの商店街をよくするために行なっていることを理解した。

このように子どもの思考の流れに沿って学習が進められ、店の販売の努力、工夫について理解がなされ、要素A群が獲得された。

#### ② 再構成段階

この段階はネットワークにより生きて働く力の基盤作りをめざすことが目的である。具体的には、

婦人服を売る店がたくさんあることが多くの買い物客を引き寄せ 個々の店の利益につながっている

ことを子どもたちにとらえさせることである。

再構成の1時では、まず、店の種類ごとに色分けされた堅町商店街の地図を提示することで、子どもたちは、圧倒的に洋服を売る店、特に婦人服を売る店が多いことを知った。そして

こんなにたくさん同じように婦人服を売る店があっても お店はもうかるのかな？

という課題が生まれた。

これは要素B（婦人服を売る店がたくさんあり競合している）の存在に気づかせ、要素Bを意味認識へと高めるための教師の働きかけでもある。

この課題に対して即座に次のような意見が出された。

C<sub>1</sub> 一軒一軒の婦人服の店は他の店と違う服を売っているから大丈夫だと思う。

他にも「大丈夫」だと考える子の発言が続いた。こうした子どもの出方は予想外であった。同種の店がたくさんあることは商売の邪魔だと子どもたちは考えてくるだろう、と予想していたからである。そこで、店の競合の意味をより鮮明にさせ、「大丈夫」、「困らない」と考える子にゆさぶりをかけることもねらって、次のような発問をした。

T 最初の地図にある店は1階にあるものだけです。でも建物の2階、3階の店、それに一つの大きなビルの中にある婦人服の店とか入れると、実際はもっと数がふえるよ、それでも大丈夫？

この発問の後、自分の考えとその理由をノートに書かせ、再び話し合いをした。ここでも「大丈夫」と考える子が大半で、次のような意見が出た。

C<sub>2</sub> 女の子はオシャレだから新しい服をいっぱい買う（だから大丈夫だと思う）。

C<sub>3</sub> もしも、きれいな花のもようがあって、それが大きかったり小さかったりしても、店がたくさんあれば、その人に合った服が選べる。

C<sub>4</sub> ラポルトみたいになくさん店があるところでは、1階へ行き、気に入ったがらがなければ2階へ、3階へ行く、それでもだめなら他の店へ行けばいい。

C<sub>1</sub>店によって違うものを売っている。それに店によって工夫もしているから大丈夫。

C<sub>2</sub>人によって好みが違うから、買う人と買わない人がいても大丈夫だと思う。

だが、「売れる店と売れない店があるのではないか」だから「困る」と考える子が少数ながら残った。そしてその後も話し合いの決着はつかず、授業は終わった。

ところで、教師は事前に要素Bを意味づける働きかけとして、子どもたちに「買う人にしたら、婦人服の店がたくさんあったら、何かいいことはないかな」と問うことを位置づけていた。店の競争について買う側の立場で考えさせようと思っていた。ところがC<sub>3</sub>やC<sub>4</sub>の発言をみてもわかるように、教師の働きかけ以前にもう、すんなり買い物客の立場に立ち、同種の店があることの利点を述べている。

この理由について考えてみた。それは子どもたちが日常生活や既存の生きて働く力である買い物の経験、さらに買い物調べから比較的簡単に消費者の立場に立つことができたからだろう。とはいえ、教師の読みの甘さがあったことは否めない。

次に評価観点①、学びの姿について述べる。本時の学びの姿は、

買い物客の店と立場に立ち 同じ種類の店があるとどんな言いわけがあるのかを話し合う

である。先にも述べたように、子どもたちは、たくさんの婦人服屋があることの利点を、買い物客の立場で考えられた。しかも、C<sub>3</sub>、C<sub>4</sub>、C<sub>5</sub>では、「いろいろ回れる」「その人に合った」「好み」「店によって違う服」「大きさ」「がら」といった言葉を使い、具体的に言っている。また、C<sub>2</sub>やC<sub>3</sub>の子どもは店の立場で考えているとみることができる。

以上のことから、学びの姿は十分表れていたと考えられる。

また、評価観点②の本時のねらいについてはどうであったか。本時のねらいは

同種の店の競争が個々の店の利益につながっていることに気づく

である。子どもたちは、婦人服の店が多く存在すると、たくさんの店が様々な種類の服から、自分の最も気に入った一着が選べるという、買う側の利益までは考えられたが、店の利益までは考えられたとはいえない。だから本時のねらいまで到達できなかったと言わざるを得ない。

そうなった原因を二つの点から考えてみたい。一点目は、商店主の立場で考えて意見を述べる子が少なく、しかもその中味が弱かったということである。例えば、C<sub>3</sub>の「同種の店があっても、～しているから大丈夫」（店の立場）という言い方と、C<sub>4</sub>の「同種の店があると、～で都合がいい」（客の立場）の言い方では微妙に異なる。つまり、子どもたちは競争を消費者の立場では積極的意味でとらえられたのに、店の立場では消極的意味でしかとらえられなかったのである。

では、どうすればよかったのであろうか。それは教師が授業の中で、C<sub>3</sub>の後に「違うものを売っていれば、どうして大丈夫なのか」と一歩深く踏みこんで問う、あるいはC<sub>4</sub>の後で、「買う人に都合がいいこととお店の人がもうかることという関係があるのか」と問うことが考えられる。子どもたちを店の立場に立たせようにすることが、本時において、要素Bを意味づける働きかけであったのではないかと思われる。

二点目は、一点目にかかわることであるが、教師が授業の中で、適切なタイミングで話し合いを整理し、次の段階へもって行かなかったことである。子どもに話し合いをまかせ、そのうち店の立場に立つ子が出てくるだろう、という楽観的見通しをもったまま、出るべき時に出なかったこともねらいにまで行かなかった要因であると思われる。

なお、次時も1時の話し合いを続け、再構成3時では、店の人や買い物客にインタビューをすることになった。その結果、「たくさん婦人服の店があっても店は困らない」「買う人にとっては選びやすい」という、子どもたちの考えが裏付けられた。



### ③ 適用段階

店の競合をよりはっきりわからせ、そして他の商店街でも店の競合が行われていることを子どもたちに理解させるために、近年増加しつつある、大型ショッピングセンターへ見学に行った。

そこでも同種の店が一つまとまりとなって、多くの客を引き寄せていることを子どもたちは理解し、ネットワークを強化することができた。

#### (2) 主体者としてかかわる学習が成立したか

主体者としてかかわる学習が成立していたかどうかを、一つは意識の連続があったのか、もう一つは生きて働く力が身についたか、という点から考えてみたい。

本単元が調べる活動や見学という具体的な体験による事実認識をもとに学習を進めていったこともあり、子どもたちは各時限の追求を主体的に行なっていた。単に頭の中での思考のみで終わるのではなく、自分の眼で見た事実を拠り所にして考えさせ、深めていけるように計画したのである。

そうすることで、子どもたちの意識は単元を通して連続していたということが出来る。

しかし、二つ目の生きて働く力が身についたかについては、(1)で述べたように、再構成の1時での教師の出方が不適切であったこと、要素Bを意味づけるための働きかけに対する吟味が不足していたことによって、ネットワークは不十分のまま終わってしまった。同種の店の競合が多くを客を集め、商店街の発展につながっているという、意味認識にまでには到らなかった。

今後は、単元計画の際、また1時限の授業設計においても、子どもの側に立って子どもの思考の流れをもっと的確に、そして深く読むことに努めなければならないと思う。そうして働きかけを十全なものにしてゆきたい。

以上述べたことからすると、子どもたちの意識の連続は十分あったものの、それを生きて働く力を身につけるためのネットワークにまで結びつけられなかったといえる。主体者としてかかわる学習は教師の意図したところまでは成立しなかったと言わざるを得ないだろう。

## 5年 「サービスを売る宅配便」の 実践を通して

### 1 教材化にあたって

#### (1) 素材と生きて働く力について

##### 本単元の生きて働く力

宅配便に携わっている人々は 荷物を速く確実に輸送するためにしゅみを整えるだけでなく 利用者のニーズに応えるために サービス向上の工夫や努力をしていることがわかる

運輸業は、今、新たなサービスを提供することによって大きくその姿を変えてきている。運輸業が変化してきた姿を端的にあらわすものが、宅配便の出現と急速な発展である。これは、社会科編第1章の2、観点③現実の社会変動にふれる という見方ととらえなおすことなしには、理解できないと考えた。

以下、社会変動にふれるという点から本単元の生きて働く力について述べたい。

・国民の生活様式は高度化・多様化してきた。そのため運輸業の姿も大きく変わり、“必要な時、すぐ必要な物を”というジャスト・イン・タイム体制が要求されてきたのである。つまり、今までの速く確実に安全にというだけでは、社会の変化に対応できなくなってきたのである。今日運輸業に求められているのは、新たに利用者のニーズに応えるということが加わった姿である。

・運輸業の中でも宅配便は、昭和51年からはじめられ、取扱個数は等比級数的に急伸し、業界としても急成長を成し遂げてきた。

この急成長の背景には (a)産業構造の変化 (b)高速道路網の整備・拡充 (c)機械化・コンピュータを導入した通信網の発達 (d)生活環境の変化(核家族化・高齢化) などの社会的変化が考えられる。こういった社会的変化を敏感にとらえ、利用者の立場から考えたサービスを整えてきたことが急成長の最大の要因なのである。つまり、利用者の要望に応えるサービスを整え、それを商品化してきたことで急成長をしてきたのである。

次に、この生きて働く力が機能面や、子どもの

実態から考えて、無理のないものか検討しなければならぬ。

生きて働く力を機能面から考えると、利用者のニーズに応えるためにサービスを整えているという姿は、運輸業だけに見られるものではない。社会生活全般の中にも見られるものである。たとえば、商店街に見られる客層に合わせた販売の工夫や、自動車工業における多様な製品の生産などもそうである。これからも時代の変化とともに、ますます消費者あるいは利用者のニーズに応えるサービスが重要視されてくるのである。

そこで、ここで身につけた生きて働く力は「通信の発達とくらし」の、くらしに役立つ情報を視聴者のニーズに応じて番組編成していることや、速く正確に伝えるために工夫や努力していることを理解させるという單元にも生きてくると考える。

また、子どもの実態という面から考えても、宅配便は身近な存在であり、家庭でも利用することも多い。だから、興味・関心を持って、自分たちの生活とのかかわりの中で主体的に追求できるだろう。以上が、生きて働く力の設定理由である。

### (2) 生きて働く力の要素とネットワーク

本単元の生きて働く力に対し、既存の生きて働く力として子どもに身につけていると考えられるのは、以下の三つである。

- ①生産地と消費地をトラックやフェリーを使って運んでいる
- ②生産の作業効率を図るために 機械やコンピュータを使っている
- ③郵便では 速く確実に物を運ぶために仕事を分担し 組織的に働いている

この三つの既存の生きて働く力と、運輸業の本質である速く確実に安全に運ぶこと、そして時代の要請を受けたサービスということから考えて、生きて働く力を身につせさせるために必要な要素は、以下の四つであると考えた。

- 要素A……①時間短縮（高速道路網の整備・拡充）  
 ……②作業の効率化（機械化・コンピュータの利用）

### ……③SD（サービスドライバー）の仕事の工夫や努力

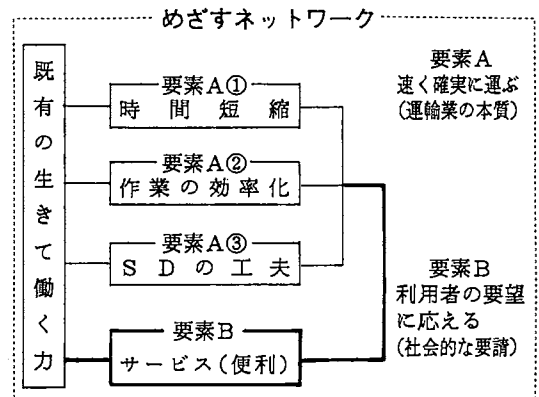
#### 要素B……サービス（便利さ）

各要素とネットワークについて述べてみたい。

要素A群は、荷物を速く送るためということを考えて、事実認識から意味認識へとつなげていけるものである。しかし、要素Bのサービス（便利さ）については、今までの見方・考え方では、意味づけられないと考えた。なぜなら、要素Aとは違い、サービスという言葉だけのとらえ方をしても事実認識から意味認識へと深まっていくものではないからである。ここでは、利用者のニーズに応えるためにサービスを整えていることや利用者のために、工夫や努力をしてきたことを、認識させていかなければならない。

本単元のネットワークは、この意識していないサービスを、利用者のニーズに応えるものだと意識させることで意味認識へと深めるものである。

既存の生きて働く力と要素A、要素Bの関係をネットワーク図で表すと次のようになる。



### (3) 主体者としてかかわらせるために

本單元における主体者としてかかわる姿は、宅配便はどうしてこんなに利用されているのかを追求する姿である。この意識を生み出すためには、まず、取扱店調べや、家の人への聞き取りをもとに学習に入る。よく利用されているという意識で宅配便取扱個数の変化グラフを見たとき、急激に増え続けてきた事実から、どうしてこんなに急激に増えてきたのだろうかという新たな課題が生ま

れてくる。こんなに利用されているのは速く確実に送れるしくみだけではなく、どんなものでも運んでくれたり、利用者のニーズに応えるサービスがあったからだというふうに、意識がつながっていくように教師の働きかけを工夫したい。

このように、意識をつなげていくことで追求が深まり、私たちが求める主体者としてかわる学習が成立すると考えた。そこで、主体者としてかわらせ、各要素を獲得させるために働きかけを考え、次の単元計画をおこなった。

(4) 単元計画 (総時数 8 時限) + 課外

	児童の主な意識の流れ	要素と働きかけの位置
獲得5	<p>沖縄から荷物が届いた (パイナップル アイスクリーム)</p> <p>・宅配便とゆうパックで届いた ・両方とも翌々日に届いた          &lt;家の人や近くの取扱店で宅配便について聞いてみよう&gt;          [荷物はほとんど翌日に届けられ よく利用されているようだ]          《宅配便はどうしてこんなに利用されているのだろうか》</p> <p>・速く届くからかな ・便利だからかな          &lt;宅配便の速さの秘密を調べてみよう&gt;</p> <p>{ 飛行機や高速道路など交通網の発達によって可能になった          金沢主管では一日に取り扱う荷物が五万個もある          &lt;たくさん荷物をどのように時間内に届けるのだろうか&gt;          [速く確実に届けるには機械やコンピュータも利用している]          &lt;荷物を速く確実に届ける秘密を見学に行って調べてみよう&gt;</p> <p>{ 交通網の発達やコンピュータの利用があったからだ          SDにも工夫があるといっていたよ          &lt;SDも速く確実に届ける工夫をしているのかな&gt;</p> <p>・荷物を集配する時は道順を考え 届ける時は順に並べている          { SDも荷物が早く確実に集配できるよう工夫している          最近荷物が増えてきたようだ</p>	<p>―― 要素A-① 時間短縮 ――</p> <p>働きかけ①-1 10年前 17年前の高速道路網と現在の比較をさせることによって 整備・拡充されてきたことをとらえさせる</p> <p>―― 要素A-② 作業の効率化 ――</p> <p>―― 要素A-③ SDの工夫 ――</p> <p>働きかけ①-2 SDの七つ道具を見せ 工夫をとらえさせる</p>
再構成2	<p>宅配便取扱個数の変化 (グラフ)</p> <p>&lt;どうして宅配便の取扱個数が急激に増えてきたのだろうか&gt;</p> <p>・高速道路網の整備・拡充やコンピュータの導入などだろう          ・荷造りが簡単になったから ・取扱店が増えてきたから          &lt;どうしてこんなサービスをしようとしたのだろうか&gt;</p> <p>・よく利用してくれる ・利用者が便利だと思ってくれる          { 宅配便の取扱個数が急激に増えてきたのは 利用者のごことを考えたサービス (便利さ) を整えてきたからだ          &lt;あったらいいなと思うサービスを考えてみよう&gt;</p> <p>・全国の駅弁宅配便 ・温泉湯宅配便 ・ペット便          &lt;考えたサービスが実現するとどんな生活になるかな&gt;</p> <p>・親戚の人やいろんな人と宅配交流ができそうだ          [利用者の要望に応えるサービスを考えればもっと伸びそうだ]</p>	<p>働きかけ② 「取扱個数の変化」グラフから要素Bの「サービス」に目を向けたい</p> <p>―― 要素B サービス (便利さ) ――</p> <p>働きかけ③ 「クロネコヤマトのあゆみ」の資料と「取扱個数の変化」グラフとを関連づけてとらえさせ サービスの意味を問う</p>
適用1	<p>&lt;宅配便は私たちの生活にどのように役立っているのだろうか&gt;</p> <p>利用者 宅配便業者 生産者 商店主の立場で討論しよう</p> <p>{ 働く人の負担などいろんな問題もあるけれども 宅配便は生活や産業を支える大切なものだ</p>	<p>働きかけ④ 討論で宅配便の重要性に気づかせる</p>

## 2 単元の実際と考察

### (1) 授業の実際と考察

私たちの研究は、生きて働く力を主体者としてかわる学習の中で身につけさせるものである。したがって、主体者としてかわる姿としての連続した意識が大切になってくる。そこで、要素B「サービス（便利さ）」が既存の生きて働く力や要素A群とネットワークしはじめる再構成の1時を取り上げる。ここでは、評価観点③と学びの姿について述べていきたい。

#### ① 要素Bに気づかせる働きかけ

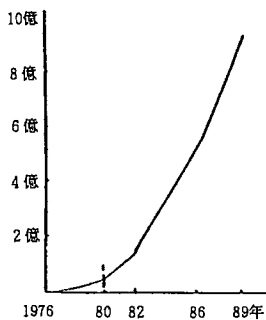
働きかけ②-1  
【ア】 宅配便取扱個数の変化グラフ

ここでは、宅配便が伸びてきたのは要素A群だけではなく、他の要素がありそうだと気づかせることである。

本時の課題をつかむために、1976年から1980年までの「宅配便取扱個数の変化」グラフを提示し、現在の取扱個数を予想させた。76年から80年の伸びから、だいたい三億個から四億個（個）〈宅配便取扱個数の変化〉くらいだろうという考

えが多かった。

そこで、80年以降のグラフを見せると現在十億個近い取扱個数に驚いていた。ここで自分たちの予想以上に急激な伸びをしていることから、本時の課題である



どうして宅配便の取扱個数がこんなに急激に増えてきたのだろうか

が生まれた。この課題についてノートに書かせた。

- C. アイスクリームでも運べるようになってきたのは、技術が発達してきたからだ。
- C. お客様のために速く確実に送れるようにいろいろと努力、工夫してきたからだ。
- C. 高速道路だけでなく飛行機なども利用されてきて、その結果、時間が短縮されてきた。

これらは、獲得段階で獲得された要素からの考えである。また、要素Bの気づきにかかわるものとして、次のような意見が出された。

- C. 出しやすいように取扱店を多くした。

- C. 外国（175か国）にも送れるようになり、国内でもどこにでも送れるようになった。

- C. 以前は荷物を持っていかなければならなかったけれど、今では取りに来てくれ、便利になってきた。

宅配便の取扱個数が増えてきたわけを、高速道路の発達や機械化など、しくみや背景の面からと、どこにでも送れる、取扱店が多いなど、利用者にとって便利になってきたという両面から考えてきた。これは、宅配便の伸びが、予想以上に急激であった事実から子どもの意識の中に、今まで獲得してきたものだけでは解決できそうにないことに気づきはじめる、何か他の要因があると追求をはじめたからである。

このように、要素Bに気づかせるきっかけを作った「宅配便取扱個数の変化」グラフは有効であったと考えられる。

働きかけ②-2  
【イ】 高速道路距離数の推移グラフ

取扱個数が増えてきたのは、「サービス」も関係があるようだと気づきはじめた。しかし、本当にサービスなのか確証が持てないのである。この働きかけの意図は、要素Bである「サービス」をはっきりと意識させることである。

サービスに気づかせる働きかけとして、76年から89年までの宅配便取扱個数の変化（600倍）から高速道路距離数の推移を予想させた。高速道路の伸びも600倍ぐらいだとか、400倍ぐらいではないかなどと予想が出てきた。2.3倍だと知って一瞬驚き「サービス」の方へ子どもの意識は流れていった。

このように、要素Bを意識させることはできたと考えるが、問題点もあった。それは、宅配便取扱個数の変化と高速道路距離数の推移を単純に比較できるかという問題である。資料選択の吟味が必要であった。

#### ② 期待する学びの姿

学びの姿  
資料から取扱個数が増えてきたのは「サービス」であるということと サービス（便利さ）の価値を見出し 取扱個数の伸びと関連づけて考えようとする姿である

そこで、「クロネコヤマトのあゆみ」という資料を配布した。この「クロネコヤマトのあゆみ」という資料は、1976年から1990年までについて、(a) サービスの商品名 (b) 取扱店数 (c) 荷物の取扱サイズ (d) 取扱個数 が書かれているものである。

資料を見て、次のような意見が出された。

- C<sub>7</sub> 86年にコレクトサービス、時間便、ブックサービスといろんなサービスをはじめたから取扱個数が増えてきた。
- C<sub>8</sub> 「宅配便取扱個数の変化」グラフを見ると82年までは取扱個数が増えていない。この資料を見ると、82年まではサービスが書かれていない。つまり、サービスが関係していたのではないか。
- C<sub>9</sub> サイズも増えてきている。これは何でも運んで欲しいという無理なことをいう人が増えてきたので、それに答えられるようなサービスをしてきたんだ。
- C<sub>10</sub> 87年は世界3カ国だったけど89年には175カ国に増えている。海外にも送れるように利用者のサービスを考えたんだ。
- C<sub>11</sub> 初めてサービスをはじめた時は、スキー・ゴルフとあまりたいしたサービスではなかった。でもだんだんとサービスのスケールが広がってきた。

C<sub>7</sub>、C<sub>8</sub>、C<sub>11</sub>のようにサービスの中身を多面的な見方で取扱個数の伸びと関連づけていることがわかる。しかもそのサービスはC<sub>9</sub>、C<sub>10</sub>に見られるように、利用者の立場に立ったサービスではないかと考えはじめてきている。したがって、ここでは学びの姿が表れていたと考える。ということは、意識が連続するための働きかけ(②-2)も適当なものであったと思われる。

### ③ 要素Bを意味づける働きかけ

働きかけ③  
サービスの意味を問う

サービスが取扱個数を伸ばしてきたことがわかって、ねらいに達したとはいえない。サービスというものを、語彙レベルから利用者のニーズに応じたものだという意味認識へと深めてはじめて、宅配便での利用者のニーズに応えとか、サービス向上のための努力・工夫といった社会的意味がわかるのである。

- T どうしてこんなサービスをしていったのだろう。
- C<sub>12</sub> サービスをすることによって利用者が増えお金ももうかる。
- C<sub>13</sub> 他の会社に負けないようにサービスをはじめた。
- C<sub>14</sub> 利用者の気持ちになってサービスを作ったり、利用者が何をしてほしいか会社が考えはじめた。

C<sub>15</sub> 利用者が多様化したので、それに合わせるようにいろいろなサービスを作っていた。

サービスの意味を考えさせ、ネットワークさせたかったがネットワークの結びつきは弱いと感じた。それは、C<sub>12</sub>やC<sub>13</sub>のように利潤追求のためにということやライバル会社との競争という意識が前面に出てきたからである。

より結びつきの強いネットワークにさせるためには、利用者の立場を明確にし、便利さをもっと子どもの願いや生活経験と結びつけてサービスの価値を深めておけばよかった。そうすれば、本時のねらいである〈宅配便の取扱個数が増えてきたのは、利用者のことを考えたサービス(便利さ)を整えてきたからだ〉に達することができたと思われる。

#### (2) 主体者としてかかわる学習が成立したか

主体者としてかかわる学習が成立したかを、子どもの意識の連続と生きて働く力が身についたかという点から述べる。

宅配便の導入は、沖縄へ転校していった子どもからのパイナップルとアイスクリームの贈り物からだった。沖縄から荷物が宅急便とゆうパックで届いたことを契機とし、もう一度自分たちの生活を振り返った。家の人や近くの取扱店で聞き取りをすると、家の人や身近な人もよく利用しているということがわかった。このようにして、36ページで述べた本単元の主体者としてかかわる姿が生まれたのである。

獲得段階では、よく利用されている理由として①速く確実に届くから ②便利だから という二つの考えが出された。アイスクリームが溶けないで届いたことから、何か速く確実に届けられるシステムがあるのではないかと追求が深まった。ここでは、交通網やコンピュータという社会的な背景や、SDにも目を向け、追求する姿が随所に見られ、速く確実にということでの子どもの意識は、連続していたと考える。

再構成段階では、獲得段階での意識で宅配便取扱個数のグラフを見て、今までの速く確実にという要素A群だけでは解決出来ないというふうに意識が深まった。要素Bのサービスの存在に気づき、そのサービスも今までの見方・考え方ではなく、利用者の立場に立ったサービスであるということに意識が高まった。

再構成段階を終えた時のO君のレポートには、次の文が書かれていた。

『……宅配便の勉強をする前、サービスって①安い②速く送ってくれる③おまけをつけてくれるなどでした。しかし今は、人々の要求が多様化している。だから

取扱店を増やすなど、利用者の立場になって手軽に利用できるようにすることが、本当のサービスであり、大切なことである。……』

自分なりの意識を大切にしながらかわり続けることで、上記の下線のように今までの見方・考え方を変え、意味認識へと深まっていったものと考えられる。

適用段階では、再構成段階で生まれた意識をより強固にするために、それぞれの立場に分かれて討論を行った。

このように、獲得・再構成・適用においても、はじめに持っていた意識で問い続け追求していったので、意識の連続はあったと考える。

では、このような意識の連続が生きて働く力に結びついたのか述べたい。

再構成の2時間を終えた時に、イメージマップを使って、ネットワークの状態を調べてみた。その結果、クロネコヤマトの努力・工夫をキーワードとし、サービスと利用者の立場という三つの語が結びついてネットワークされた子どもは、約3分の2であった。この結果から、この段階では全員が再構成段階を経たとはいえない。

しかし、単元を終えると、宅配便で身につけた生きて働く力を、生活場面にまで広げようとする姿があった。その一つのあらわれがY君のレポートである。

『宅配便の仕事は、前まで荷物を運ぶもの。つまり、「行動的な仕事」と考えていた。でも、今では「利用者の立場で考える」という「考える仕事」が大きく加わっているということだ。この「利用者の立場で考える」というのは、他の商売にも見られる。アトリオなんかは、若者からお年寄りまでの好みを考えてあるんだと思う。利用者（消費者）があってこそ成り立つ商売だから、利用者の心をつかむことはとても大切なことだ。』

レポートの中の下線のように、単元で身につけた生きて働く力が社会的事象と関連づけられ、主体者としてかわり続ける姿がみられた。さらに、学びの姿では、授業の中で自分の意識を大切にかかわり続けた姿が、帰ってからも自分で調べたり、取材してレポートにまとめるといった追求の姿としても表れていた。

したがって、主体者としてかわる学習は成立していたといえるだろう。

## おわりに

子どもたちに将来にわたって自己の可能性を切り拓く糧となる「生きて働く力」を身につけさせようと、「主体者としてかわる学習」の成立につとめた2年次がすぎた。この一年を振り返り、主な成果と問題点について述べてみたい。

成果の一つ目は、社会科編1章2節「単元の生きて働く力を設定するために」で述べたように分野別の生きて働く力を単元の生きて働く力へと具体化し、設定するための三つの観点をもてたことである。これによって、

- ① 単元の生きて働く力が、教科の本質から見ても、より価値の高いものとして設定できるようになった。
- ② ①②③のどの観点をもとにして単元の生きて働く力が設定されたか見ることによって、ある程度、どのような知識・技能が要素となるか見通しをもつことができるようになった。
- ③ 成果の二つ目は、子どもの「わかり」の面から要素を要素A、要素Bと区別してとらえることができたことである。これによって、
- ④ 社会科編Ⅱ章3節「要素の決定」で述べたように、分野別の生きて働く力を単元の生きて働く力へと設定するための三つの観点と考えあわせることによって、要素A、要素Bとはどのような知識・技能なのか見通しをもつことができるようになった。
- ⑤ 単元計画を立てるさいに、どの要素を先に獲得させればよいか、その順序と根拠がもてるようになった。
- ⑥ 既存の生きて働く力と要素を結びつけネットワークさせ、生きて働く力を生みだすためには、どのような働きかけがいつ必要なのか、見通しをもつことができるようになった。

これらの成果によって、単元計画を今まで以上に子どもの意識の流れに沿ったものとして立てられるようになった。しかし、実践編を読まれてお分かりのように、それぞれの段階での教師の働きかけが、まだ十分機能していないのが実際である。

要素やネットワークに対する私たち社会科のとらえをさらに深めることは勿論であるが、それとともに授業中の子どもの意識を察知し、対応していけるようにさらに努力を強めなければならない。その意味からいえば、再構成の授業においては複線化の授業案を考えるのも意義のあることと思える。